

2022年  
11月14日 No.1679



週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryo.co.jp>



資  
料

潮流

## 「防災避難着」のカルチャーを

株式会社スギタ企画営業部長、防災士 杉田佳之

### 令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要

文部科学省

### CONTENTS

#### ▶ 2 潮流

「防災避難着」のカルチャーを

杉田佳之(株式会社スギタ企画営業部長、防災士)

#### ▶ 5 解説・ニュースの焦点

○文部科学省が「寄附ポータルサイト」を開設

○次期教育振興基本計画で新指標を検討へ  
編集部

#### ▶ 8 特別企画

運動部活動の地域移行での事例は?

編集部

#### ▶ 10 特別資料

特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について(通知)

文部科学省

#### ▶ 12 生涯発達時代のよくわかる!発達障がい入門 養護教諭の重要性

水内豊和(帝京大学文学部心理学科准教授)

#### ▶ 14 校長講話

「いじめ」について考える

並木浩子(東京都昭島市立昭和中学校校長)

#### ▶ 16 実践! 校長塾

「学校改革」への一手③

田中祐二(広島県・江田島市立能美中学校校長)

#### ▶ 19 資料

令和3年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要

文部科学省

#### ▶ 35 教育問題法律相談

一時保護所での教育・学習支援の在り方は?

角南和子(弁護士)

#### ▶ 36 学校事務新時代

GIGAスクール・教育ICTと事務職員①

教育政策から事務職員の役割を考える

柳澤靖明(埼玉県川口市青木中学校事務主査)

#### ▶ 38 「学級・授業づくり」虎の巻

細分化して見る力

俵原正仁(兵庫県芦屋市立山手小学校校長)

#### ▶ 40 管理職養成 教頭実務ガイドンス

教員不足問題の実態

井都良一(全国公立学校教頭会事務局長)

#### ▶ 42 高校現場最前線

地域連携による新たな学校づくり⑤

伊藤大助(新潟県立阿賀黎明高等学校校長)

#### ▶ 44 現場の課題に応える教育機関

「科学する心」で未来を切り拓く子どもたちに  
島田勝裕(公益財団法人ソニー教育財団科学教育部統括部長)①

#### ▶ 46 データで見る教育

学び続ける教員を支えるキャリアシステム  
(将来的なイメージ)ほか

#### ▶ 47 BOOK

『子どものための居場所論

異なることが豊かさになる』

『エピソード語りで見えてくる インクルーシブ教育の視点』

#### ▶ 48 自著を語る

『私たちはどう学んでいるのか

—創発から見る認知の変化』

鈴木宏昭(青山学院大学教授)

#### ▶ 51 品川裕香の共感教室

ネガティブな感情はチクチク言葉を生む、  
いけない気持ち?

品川裕香(教育ジャーナリスト)

#### ▶ 52 マイオピニオン

厳しい条件下において自分で判断して行動する  
二宮清純(スポーツジャーナリスト)

# 潮流

株式会社スギタ企画営業部長、防災士

すぎ  
た よしゅき  
杉田佳之さんに聞く



## 「防災避難着」の カルチャーを

大切な人を守るために  
自分自身を守る力が必要になる。  
「自助・共助」を支える災害時の  
想像力を鍛える教育が求められている。

### 災害時にも役立つ全身反射ポンチョ

株式会社スギタは、大阪市で創業してから86年になる雨傘・日傘などのメーカー。同社が夜間の交通事故撲滅に対する商品として開発してきた「全身反射ポンチョ」が、2020年の内閣府主催の「ぼうさいこくたい」の審査に合格し、2021年には一般社団法人災害防止研究所などによる「防災グッズ大賞」なども受賞した。その名前の通り、一般的の反射素材の雨具と異なり、全身が反射して視認性が大きく向上するのが特徴だ。

杉田 もともとは、交通安全のために、夜間などでも光をよく反射する雨具として開発したのですが、当時の防災担当の内閣府特命担当大臣から「(全身反射ポンチョが)防災にも使って、被災時などの捜索活動でも早期救命に使えるのではないか」と連絡をいただきました。そのことがきっかけで「防災避難着」として、地震や豪雨、台風などの災害時にも使える商品として工夫してきました。

今までの反射材は、燃やすとダイオキシンが出る塩化ビニール製のものが多く、光を受けると銀色や黄色などの螢光色で光るもののが主流だ。また反射材も、部分的に使われてい

ることが多い。同社が開発した「全身反射ポンチヨ」は、生地へのコーティングを工夫するとともに、光を反射する素材が使われてポンチヨ全体が光るため、遠方からの懐中電灯の光にも反射して、視認性が大きく向上している点に特徴がある。

また、全方向から光を反射するだけでなく、撥水や防水や遮熱効果が高まるような素材をつけており、体温を逃がしにくいようにするなど、災害時の低体温症への対策にもつながるようにした。一般向けの全身反射ポンチヨのほか、子ども向けや、車いす用の全身反射ポンチヨなども開発した。

杉田 最近は、線状降水帯など、局地的に大雨が降って、短時間に大きな被害が出たり、台風や大型の地震などの被害も想定されたりしています。よく災害発生時の「生命のリミット」として72時間以内に被災者を発見することの大切さが指摘されていますが、自衛隊などを含めて大がかりな救助活動のような「公助」への期待だけでなく、「共助」や「自助」としてできることを意識することが私たちにも求められています。避難する際に、逃げ遅れたり、取り残されたりする場合もあることも想定して、このような避難着を着ることで発見率を高めることができます。

内閣府は日本海溝・千島海溝周辺海溝型地震による被害想定を出しましたが、死者は19万人、そのうち約4万2000人が低温症によるものと想定しています。反射材によって遭難時の発見が容易になるだけでなく、体温となるべく維持できるような機能が避難着には求められています。

## 「防災士」の資格を取得

杉田さんは、企画営業部長として、製造した商品の説明にも役立つと考えて、「防災士」の資格を取得した。「防災士」とは、特定非営利活動法人日本防災士機構による民間資格。同機構の研修講座を受講し、筆記試験に合格した上で、「救急法等講習」「普通救命講習」「上級救命講習」を取得した者に認定される。

年齢に制限はないため、学校の生徒でも取得が可能だ。自治体などでは、防災担当者などをために資格取得の補助制度などを設けているところもあるという。

杉田 私自身は、このような商品を扱うこともあって、自治体などの危機管理室などの関係者から「防災士」の資格取得をすすめられました。実際に取得してみると、自分が大好きな人を守るために、何もできない

自分であってはダメだと感じました。学校の生徒さんや学生さんなど、若い人たちのではなくて、それこそ「自助・共助」の精神で、自分たちで自分たちの身を守り、大切な人を守っていくという姿勢が大切なではないでしょうか。

実は、私自身も「防災士」の試験を受験したときに、どこかの学校の生徒さんを見かけました。聞いてみると、「防災士」の認定料の4分の3までを補助してくれる仕組みがあるということでした。生徒さんでも「防災士」の資格取得で補助制度があるのでから、子どもたちの命を預かる学校の先生方も、ぜひ、こうした資格を取得できるよう行政などで支援してほしいです。

災害大国と言われる日本。さまざまな災害が想定されているが、大切なのは「想像する力」ではないか、と杉田さんは指摘する。例えば、地震が発生したとき、よく「机の下に逃げる」などと言われるが、こうした「○○のときは、▽▽する」などと、杓子定規に考えていると、危険性の認識が状況に応じて変化していくことに対応できないケースがある

杉田 災害時は、特に、状況を判断しながら、どういう対応が必要なのかを考える力、想像する力が特に求められると思います。ですから、学校などの防災教育なども、「この状況はどうすればよいか」など、具体的な場面に即して、みんなで意見を述べたり、特定のテーマで深掘りをしたりしていくような授業なども必要になつてくるように感じています。教えるのは先生だけではなく、こうした議論を通して、子どもも先生も、共に学んでいくといふ姿勢が必要になつていいのかを感じています。

特に、線状降水帯の危険性などについては、まだ、常識として定着しているわけではありませんので、具体的な状況を想定しながら、どうふう行動をすべきかを、みんなで話し合つてふくとこの学び方が必要ではないでしょうか。

例えば、自宅に祖母が居て、電動車いすを利用している場合、何十キロもある重たい電動車いすは簡単に持ち出すことはできないので、そのような場合はどうしたらよいか、などについて考える。解決策があつたとしても、一つだけではないかも知れず、適切な方策が見つからないこともある。ただ、さまざまなかasesを想定して、その場合はどうするべきか、日頃から「考えをめぐらす」という体験を積み重ねておくことが、災害時にも役立つことがあるという。

業として、「全身反射ポンチ」などの商品が、災害時の「災害弱者」と言われる高齢者や障害者などを救つうことにつながることを願っていますが、一つの小さな会社だけでは限界もあります。ですから、「災害避難着」を活用するという力

想像力を豊かにする

「防災士」の講座などでも、一般的な防災に関する知識だけでなく、与えられた情報を読み取つて、防災のために必要な行動を考えるという内容があるという。例えば、一枚の地図を与えられて、地震や洪水、津波などが発生したときに、「その地図内でどこに逃げるのが良いか」とか、「自分が暮らす家を建てるにはどこが良いか」などを考へるといふ。

杉田 先ほども言いましたが、災害への対応は、状況に応じて異なってきますので、情報を読み取つて、どういう災害が想定さ

れるのか、どのような行動をとるかで危険性が少なくなるか、などについて想像力を働かせる経験が大切です。こうした経験をしていないと、実際の災害などに出合つた場合に、とつさに行動が取れないと思います。

そのためには、「自助・共助」の必要性を国が強調するのであれば、何よりも「教育」の力が必要ですし、そのような教育を国として支援していくことが必要だと思います。

株式会社スギタ＝<http://www.sugitakasa.com/>

